

助詞における日・琉関係

大 津 不 二 也

序 ——

四回にわたる拙論で、主として語法について論じて来、最後に助詞の項が残った。

なお、音韻についても詳述すべきであるが、音韻は18世紀前半頃から3母音化し始めたのであって、それ以前は5母音で日本語と大した差異はなかったと考えられるし、それに各論が日・論琉関係を中心としたものであるので、音韻は各論で少し触れた程度で措くことにする。

本論は沖縄語論の最後になるので、今までの各論の大約を再録し補足し、本論の結びと共に五回にわたっての結びをもしたい。

前にも述べたように、資料もあまり手元に持たず、また力不足で論証にも不十分のそしりを免れず、碩学・先学の方々のご教示を乞う次第である。

本 論 ——

(1) 格 助 詞

- (a) 起点を示す場合—kara。…kara…madi [沖縄語圏に属していた大島諸島では、…kara…kadi、その古歌では…kara…made、…kara…gate。宮古では…kara…gami。八重山では、古謡には両助詞を併用した用例は見当たらないが、今日…kara…madeが用いられる。]。㊟本項では \widehat{tj} の代りに \widehat{ch} と表記した。

1. Mma kara ichabira. (馬から行きましょう。)
2. Kagoshima kara Ūshima madi yaka ufu chikandidu umariyabin.
(鹿児島から大島までより少し近いと思われます。)
3. Iri kara agari nkai miguyabin. (西から東へめぐります。na \widehat{kai} については、後述。)

- (b) 目標・方向・動作の行われる地点を示す場合—nkai (沖繩語圏に属していた大島諸島では, kachi, hachi, chi; その古歌ではhe; 宮古ではnkai, kai; 八重山では, naya, kai, その古語ではkai が用いられる。)

㊦ *は、音韻変化から考えて、その前の段階を示すものとする。

1. Mā nkai. (何処へ。何処へか。)
2. Kunu midzi nkai uchitōru fikari (この水に映っている光)
3. Fuka nkaē (←*nkai+*ya) njirari yabiran. (外へ出られません。)
4. Anu kī nkai kakatōru chichi chaga yayabira. (あの木にかかっている月は、いかがですか。)

大島諸島の kachi, hachi, chi は、同じ形から派生し、k-h の音韻対応から考えて kachi → hachi の過程を取り、これらが使い馴されるに従ってぞんざいな発音となり、chi が生じたと考えられる。なお、大島諸島では gare, gate, gadē が用いられることがあるが、gare は日本の文語 gari (幹) と同系、gate, gadē は鹿児島方言の限度・程度を示す ga' と関係があると考えられる。

「おもしろうし」に現われる gyame や宮古の game を考えると、古くは *game があって、宮古の gami となったのであろう。

nkai において、n に影響されて有声音化したり r が脱落したりすることを考えるならば、*gari の形に遡り得るように考えられる。game, kachi についてはなお後放を要するが、これらは沖繩語の独自のものであろう。

- (c) 時・帰着点・結果などを示す場合—ni (大島諸島ではn。宮古では, n。八重山古語ではni, 八重ではna。naは, *ni+*ya の融合形であろう。)

1. Ittāya rukujimē ni ukirandarē naransiga, ……。 (あなたがたは、6時前に起きなければならないが、……。)
2. Kuri wanni kwirani. (これを私にくれないか。)
3. Ūffa ni yū unimishōchi uchurasa yabin. (母によくお似なきて美しくあります。)

以上のように、niあるいはnが用いられている。これは、ni→nの過程を取り、日本語の格助詞 ni に対応するものである。

- (d) 主語あるいは他の語との関係を示す場合—ya (ya は、その前の語尾と融合して現

われる。しかし、ya の前の語の語尾が長母音の場合は融合しない。), ga。

例えば, Tarū ya 太郎は, kami+ya → kamē 神は, kuruma+ya → kurumā 車は, fuyu+ya → fuyō 冬は, tin (←*ten) +ya → tinō 天は, など。宮古では, 前の語と融合して, その語尾が長母音で終り, ya は単独に現われない。八重山も同様であるが, その古謡では ya の代わりに ga が見られる。

1. Chūnu chinchē (←*tinchi+ya) sangwachi gurunu fadamuchē (←*fadamuchi+ya) aran kanā. (今日の天気は, 3月頃の気候ではないか。)
2. Undzunu utsuchiya nanji natōyabīga. (あなたのお時計は, 何時になつておりますか。)

また, ya は ga と共に, 次の語へのつながりを示す。

1. Satō (←*satu+ya) iriga shabira. (砂箱は, 入れることをし持ら。→砂箱を入れましょうか。)
2. Unjō (←*unju+ya) chikō (←*chiku+ya) usichi ga yayabira. (あなたは鶏は, お好きでしょうか。)

ya は, 日本語の副助詞 wa (→a), ga は格助詞 ga の対応形と考えられる。

(e) 比較するものを示す場合—yaka, yakan [←*Yaka + *n (←*m←*mu ←*mo)]。

1. Mukushī ya chikyū yaka ufisharu fushi yayabīn. (木星は, 地球より大きい星です。)
2. Urē (←*uri+ya) nū yakan yī guchisū yayabīn. (それは, 何よりよい御馳走です。)

この助詞には, 日本語の対応形を見出すことができないように思われる。沖縄語独自のものと考えられる。

(f) 引用を示す場合……ndi。

1. Shūshuya numitē ndi umutō yabīn. (すこし飲みたいと思っております。)
2. Shichinanu mashi ndi iyabīn. (シキナの方がよいと言います。)

この助詞は、日本語の対応形を見出し得ないように考えられ、沖縄語独自のもの
であろう。

(g) 原因・理由・場所・手段を示す場合—wute, wutē [*wute+*yaか*wote+*yaかの転訛形で, wu, wo は wun (居る) かその前段階 won (居る) かの連用形の下畧形か語幹かであろう。 ti (←*te) の接続助詞は、語幹を受けるのが、沖縄語では通則である。]

1. Unjunā mmē kunu kaziwutē sachorahazi dēbiru. (お宅の梅は、この瓶で咲いておりました。)

2. Najippunu shaku wutē ichabin. Jūgufun wute ichabin.

(何十分の程度で行きますか。15分で行きます。)

以上のように、wute は文節から転訛して格助詞のように用いられるようになったのであろう。

従って、この対応形を日本語に見出すことができない。この助詞は、沖縄本島で用いられ、他の諸島語では使われないので、沖縄語独自のもので、しかも比較的後にできたものであろう。

(h) 手段・原因などを示す場合—shayi, shāyi. shayi, shāyi は、日本語の格助詞 nite (文語), de (口語) のような機能を持つものである。これらの語源は確言できないが、*su (事・物) → *si + an (「ある」の意味) の連用形 *ari → *ayi あるいは *ayi の結合したものが、あるいは shun (「する」の意味) の連用形 *shi + an の連用形 *ari → *ayi あるいは *ayi の結合したものがであろう。これらは、沖縄本島や八重山で用いられる。

1. Dōkuru shayi yōyaku ukikuru nayuru atayidu yayabiru.

(独力でようやく起き伏しのできる当てがあります。)

2. Kurē nūshayi tsitēga. (これは、なにで作るか。)

3. Sanjūwin shāyi uyudzimishōri. (30円でお譲りめされよ。)

shayi, shāyi は、文節から格助詞に転用されたもので、沖縄語独自の形で、比較的のちに生じたものであろう。

(i) 節の主語や連体修飾語を示す場合—nu

1. Kasiminu kakatē wuyabiranni. (霞のかかつてはおりませんか。)

2. Shichinanu mashindi iyabin. (シキナのものが多いと言います。)

nu は、日本語の格助詞 no に対応するもので、*no → nu の過程を経て今日に至ったものである。

(j) 並列・共同・引用などを示す場合—tsu (沖縄語圏に属していた大島諸島では、to、時に chi。宮古・八重山ではtsuが用いられる。) と ndi。

1. Nagurantsu ufaran tsu ushāchi shigunjūhachi ayabīn. (名護蘭と大葉蘭と、おおかた 4・50 鉢あります。)

2. Bōenkyō tsu sukuryōjūchi tsu shayi fakayabīn. (望遠鏡と測量術とで測ります。)

3. Tigami kachitē ndi umutōyabīn. (手紙を書きたいと思っております。)

tsu は、*to → *tu → tsu の過程を経て今日に至ったものであるが、日本語の格助詞 to に対応するものである。ndi は、日本語にはその対応形を見出せないようで、沖縄語の独自のものであろう。

(2) 接続助詞—活用する語について次の語に続けるものである。

(a) ti (←*te), tin (←*temo), dun (←*domo)

1. Kasiminu kakatē (← *kakati + *ya) wuyabiranni. (霞のかかつてはおりませんか。)

2. Chūya duttu nagaza shabiti, na uituma shabira. (今日はたいへん長座してしまつて、もうおいとましましょう。)

3. Nna kasiminu kakatō [← *kakate + *yu (← *wu ← *wo) + *ya] yabin. (みんな霞がかかつております。)

ti は、*te → ti の過程を経て今日に至っているもので、日本語の接続助詞 te に対応するものである。

tin は、*te + *mo あるいは *temo → tin の過程を経たもので、強調を示すものである。

1. Nū kabiyatin [← *ti (← *te) + *n (← *m ← *mu ← *mo)], yutashaga ayabira. (なに紙であつても、よいでしょうか。)

2. Tōchōnu shumutsiya dun yarē, māyatīn muchōyabīn. (東京の書物屋であるなら、どこであつても持つております。)

tin は、日本語の接続助詞 temo (口語) に、dun は接続助詞 domo (文語) に対応するもので、dun が古く、今日は tin が用いられる。

- (b) ba, kutu (← *koto), sigā。(沖縄語圏に属していた大島諸島では ba が有力であり、(写)
宮古では bamai, 八重山では kā が用いられる。沖縄本島の sigā に対して、宮古で suga, 八重山では songa が対応する。)
1. Pishika ba (pishikari ba), pitunu idzi ikirasan padzi dya. (寒いので、人出が少ないはずだ。)
 2. Acha chikumi shabikutu, imenshēbiri. (明日は菊見をしますので、おいでなさいませ。)
 3. Chinūya ichiūsanta sigā, chūya nūya uchi ichuru kangē. (昨日は行きおせなかつたので、今日は何をおいても行く考え。)

以上のように、sigā は、主として逆接の場合に、kutu (←*koto 事) は順接の場合に用いられる。si, su は「事」を意味する名詞で、sigā, suga は名詞の si か su かに接続助詞 ga が付いた文節から生じたものと考えられる。kutu は、前段階に *koto 事が推定されるので、ひとつの名詞が接続助詞のように用いられたのだろう。

ba は、日本語の接続助詞 ba に対応するもので、sigā, suga, kutu は、後に生じた独自のものであろう。

- (c) yarē, sē, shē. (これらは、沖縄本島で用いられ、他の諸島では、ba や ya が用いられるようだ。)
1. Tōchōnu shumutiyādunyarē, mā yatin muchōyabin. (東京の書物屋であれば、どこであつても持っております。)
 2. Keikikyū nuidun sē, mīurusara fadzi yayabin. (軽気球に乗りでもすれば、見おろされる筈であります。)
 3. Kunugurini shē, marinē umiji yabītasā. (この頃にしては、まれな大水おおみずがありましたね。)

yarē は、an (ある) の連用形 *ari + 語と語との関係を示す助詞 *ya の結合した文節の転訛形、sē は shun (する) の連用形 *shi + *ya の結合したものの転訛形と考えられる。

以上のように、日本語が多くの条件法を表わすのに多くの接続助詞を発達させていたのに対して、沖縄語では特殊の文節を転用して接続助詞の機能を持つものを発達せしめたのであろう。

(8) 副助詞一体言や用言、その他の助詞 *kara* や *te* などについて、副詞のように次の語にかかっていくものである。

(a) *du* (←*do*) ……連体形は、「おもしろさうし」、大島諸島の古歌、琉球戯曲、八重山古謡などに見られる。

1. 蹴上げたるつよは、露からど^{かば} 香しやある。(「おもしろさうし」巻14の1章。
(露))
2. おぎげや ぬよてどたちよる。(前掲書巻11の7章。
(お酒に酔つて 立ちおるよ。))
3. *Nitushē kunēdanugutu du asiga, nā farun ufu natōru.* (新年は、この間のごとくあるが、もう春になつておる。)
4. *Ichinin kurashun iminugutu du ayabīru.* (一年暮すのは、夢のごとくあり侍る。)

*du*一連体形の係結は、奈良時代(711年頃—794年頃)の「ぞ」一連体形の係結に対応するものであるが、その他の係結は見出すことができないようである。

なお、この *du* (←**do*) の形が文の終りに用いられることが非常に多い。これについては、後述の終助詞で述べよう。

(b) 限定を示す場合—*bakayi, bakāyi*。

1. *Yunin bakayi kayuyabitan.* (4年ばかりかよいました。)
2. *Wannē chikubakāyē (←*bakāyi + *ya) aran, kusabananu ruyē nūn sīchōyabīn.* (わたしは、菊ばかりではない、草花の類はなにも好いております。)

bakayi, bakāyi は、日本語の副助詞 *bakari* (文語) に対応するものである。詳述は省略する。

(c) 軽く大概に言うことを示す場合—*yarawan*。(沖縄半島以外ではあまり聞かないようである。)

1. *Itsi yarawan imenshēbiri.* (いつでもおいでなさい。)
2. *Nūyarawan gufushinnu tukurō utannimishēbiri.* (なんでもご不審のところ)

は、おたずね下さい。)

yarawan は、鎌倉室町時代 (1,192年頃~1,603年頃) の疑問・不確実を示す副助詞のように用いられた *yāra* (←*やらむ*) + **ya* + **mo* に対応するものと考えられる。

(d) 例示を示す場合—*nde, ndē* (沖縄本島以外ではあまり用例を見出せないようである。)

1. *kunu munndēya chāga yayabira*. (この物などはいかがでありますか。)
2. *Nasibi shibui ndeya ufōku tsukutē yabin*. (茄子・胡瓜などは、多く作っております。)

日本語で例示を示す場合には、副助詞「など」があるが、今のところ対応形は見せないように思う。*nde, ndē* は、沖縄語独自のものであろうか。

(e) 程度を示す場合—*gurē*. (各諸島でも、違ったものは見出せないようである。)

Shichihatitan gure ya ushagitin yutasha yabin. (7・8反ぐら^{たん}いはさし上げてよろしいです。)

gurē は、日本語の副助詞 *gurai* あるいは *kurai* (口語) に対応するものである。

(4) 終助詞—*一体言*や*用言*・その他いろいろの語につき、主として文の終りにあって、疑問・禁止・詠歎などを表わすものである。(諸島で多少の違いがあるが、煩を避け、おもなものについて述べる。)

(a) 疑問を示すもの—*kaya, ga, gaya, i*, など。

1. *Sakurā duttu i fana ayabirankaya*. (桜はたいへんよい花ではありませんか。)
2. *Mānkai unjimeshēru kange yayabiga*. (どこへおいでめされる考えでありますか。)
3. *Duttu fiku natō yabīsiga, rittōya ichidebiru gaya*. (たいへん寒くなっておりますが、立冬はいつではべるか。)
4. *Madzi fanadunukara chimbutsi shabimi*. (まず花園から見物しはべるか。)

以上のように、*kaya, ga, gaya, i, na* は、文末につき、疑問を表わす。しかし、*i* は文末の用言の終止語尾が *~m* (*→~n*) の場合か、打消の助動詞 *n* (←**nu*) に対応するものがその前に来る場合かに、限られる。そのうち *ka, ga* は日本語の終助詞 *ka* に対応するものであろう。

(b) 感動・禁止を示す場合 — *sāyā, na*, など。

1. *Unjunānu uyāduyē shidzikanā tukuru yati, yutashā yabī sāyā.*

(あなたのお宿りは、静かな所であつて、よくありますね。)

2. *Utukunu kakimunō duttu yutashā yabirunna.* (お床の間の掛け物は、たいへんよいですね。)

3. *Unna kutuya sunā.* (そんなことは、するな。)

yā は、日本語の終助詞 *ya* に対応するもの、*na* は終助詞 *na* (感動) に対応するもの、また3の *na* は終止助詞 *na* (禁止) に対応するものである。

(c) 断定や強調を示す場合 — *do, dō*。その外に前に掲げた *ya, yā, sā, yasā, yassā* も用いられる。(大島諸島では、*du* もあるが、*do* の *o* と *u* との相通の結果であろう。沖縄では、宮古・八重山ともに *dō, do* である。)

1. *Ittā ya rukujimēni ukirandarē narandōya.* (お前たちは、6時前に起きなければならぬぞ。)

2. *Kunu kakē akasasiga, shibusaru hadzidō.* は、*Kunu kakē akasasiga, shibusara ya.* とも言う。(この柿は赤いけれども、しぶいだろうよ。)

dō あるいは *do* は、日本語の終助詞 *zo* と対応するものとも考えられるが、*ya, yā, yasā, yassā* ほど用いられないことから考えて、室町時代以後の薩摩藩との交渉によって薩摩方言の終助詞 *do* (薩摩方言では、今日でも文末に必ずと言ってよい程用いる。)の影響を取り入れたものではないかと考えられる。

本誌第4号の「国語と沖縄語との関係」で、動詞・形容詞の活用は、*an* 型活用(活用語尾 *-ra, ~ri, ~n, ~ru, ~ri, ~ri*)を取っていること、語彙のなかには、地域的關係や西暦14世紀末からの薩摩藩との関係から薩摩方言が多く入り込んでいることを述べた。

次いで、第5号の「沖縄語における「語の活用」」で、沖縄語圏に属する奄美大島諸島の諸方言、古代沖縄語(わたしは、琉球語の呼称を用いる。)を残存している先島(宮古・八重山)の諸方言、沖縄本島の沖縄語、琉球語(古代沖縄語)を伝えている「おもしろし」「語音翻譯」などの琉球語を比較研究すると、沖縄語の動詞・形容詞も西暦17世紀初め頃までは、日本語の四段・段活用・変格活用・「ク」活用・「シク」活用を持っていたことが推定されると述べた。

次いで、第6号の「助動詞における日・琉関係」では、沖縄語の助動詞が日本語の文語の助動詞に対応するものを残存していることを述べた。——推量・意志・勧誘の丁寧な言い方の場合の助動詞のようなものとしては *yabin* あるいは *yabin, hazido, hazidēbin* などがあげられる。*yabin* あるいは *yābin* は、日本語の文語の「侍る」に対応するもので、「侍る」は院政頃（～1,220年頃）まで有力であったろう。過去・完了の言い方の助動詞あるいは助動詞のようなものとして *tan, tōn* があげられる。これらは、それぞれ「たり」や「て+おり」に対応するものであろう。「たり」や「て+おり」は、平安時代まで（～1,192年頃）有力であったと考えられる。打消の言い方の助動詞としては、*n* 時に *nēn* がある。*n* は日本語の文語の「ぬ」に対応するものである。*nēn* は、日本語の口語の助動詞「ない」に対応するもので、室町時代前後（15-6世紀頃）に取り入れられたものであろう。使役・受身・可能の言い方の場合の助動詞としては、使役には *shun*, 受身・可能には *rin* がある。*shun* は、日本語の文語の「する」に対応し、*rin* は日本語の口語の「れる」に対応するもので、室町時代前後に入ったのであろう。敬意を表わす言い方の場合の助動詞のようなものとしては、*u + 連用形 + mishēbin*, 尊敬の動詞の終止形 + *shēbin*, 尊敬の動詞の終止形 + *shochi + kwimishēbin*, *uya + 連用形 + mishēbin*, 尊敬の動詞の終止形 + *shōrari + ya + shābin*, *u + ある尊敬の動詞の連用形 + mishōrari + ya + shibin* などがあ
る。これらは、沖縄語圏で独自の発達をしたものであろうが、これらの語根 *mish-*
un, Yabin, bin は、それぞれ日本語の文語の尊敬の動詞・補助動詞「召す」、丁寧
の補助動詞「侍る」に対応するものであろう。「召す」・「侍る」が院政時代頃（12世
紀末～13世紀初め）までは有力であったことを想起すべきであろう。様態や推定を表
わす言い方の場合の助動詞あるいは助動詞のようなものとしては、様態は *gutōn* あ
るいは *gutōn*, 推定は *gisan, yōna, yōsi, yayabin* があげられる。*gutōn* あ
るいは *gutōn* は、日本語の文語の「如し」に対応するものであろう。*gisan* は、沖縄語の
独自のものであろう。*yōna* は、室町時代（1,342年頃～1,603年頃）以後有力になった。日
本語の口語の「ようだ」に対応するものである。断定を表わす言い方の場合の助動詞
のようなものとしては、*yasa*, 時に *yabin*, 宮古では「ある」「おる」に対応する
wun, 八重山では *an* がある。沖縄語では、平安時代まで有力であった断定の助動詞
「たり」あるいは「なり」の対応形が見出されない。これは、日・琉の分離が奈良時代
（710年頃～794年頃）以前であったことを裏付けるように考えられる。なお、推定の言い

方の場合の助動詞あるいは助動詞のようなものとしては、連用形 *sōni*、連体形 *sōna*、*muyō yabin*がある。*sōni*、*sōna* は、それぞれ日本語の口語の様態の助動詞「そうだ」の連用形・連体形に対応するもので、室町時代前後に取り入れたものであろう。

以上のように、沖縄語が多くの日本語の文語に属する助動詞に対応するものを持ちながら、また独自のものを発達せしめたことは、日・琉の分離が言語年代学的研究と共に奈良時代以前に遡れることを暗示しているように考えられる。

次いで、第7号の「代名詞における日・琉関係」で、人代名詞・事物代名詞は日本語と類似しているが、場所代名詞は後れて生じたもので、沖縄語では特有の接尾辞 *ma* を発達させたことを述べた。人代名詞としては、自称に *an*、*wan*、*wa*、対称に *ura* あるいは *urā*、*na*、遠称に *ari*、不定称に *ta*、*taru* がある。*an*、*wan*、*wa* は、それぞれ日本語の文語の「あれ」、「われ」、「わ」に対応するものである。*ura* あるいは *urā* は、薩摩方言「おら」に対応するものであろう。〔*ora* に対応するものは、薩摩藩が支配していた奄美大島諸島でも用いられている。〕。*ari* は、事物代名詞を流用したもので、事物代名詞「あれ」に対応するものである。*ta*、*taru* は、日本語の「た」「たれ」に対応するものであろう。事物代名詞としては、近称に *kuri*、中称に *uri*、遠称に *ari*、不定称に *jiri*、*no*、*nu* あるいは *nū* がある。*kuri*、*uri*、*ari* は、それぞれ日本語の「これ」「それ」「あれ」に対応するものである。*jiri* は、日本語の事物代名詞「いつれ」に対応するものであろう。*no* や *nu* あるいは *nū* は、日本語の「なに」に対応するように考えられる。〔語尾の *i* の脱落、〔*n*〕と〔*u*〕との相通、同化などを考えると、**nani* → **nan* → **nau* → *nō* → *nū* あるいは *nu* の過程が考えられる。〕場所代名詞としては近称に *koma*、*kuma*、中称に *uma*、遠称に *ama*、不定称に *duma* がある。これらのなかの *ko* あるいは *ku*、*u*、*a*、*du* はそれぞれ日本語の「こ」、「そ」、「あ」、語根「いつ」あるいは「ど」に対応するものと考えられる。しかし、接尾辞の *ma* と日本語の接尾辞 *ko* とは対応しない。考えるに、人代名詞・事物代名詞が生じ、その後に場所代名詞ができたのであろう。従って日・琉分離の時代には、場所代名詞はできていないで、分離後のおの語圏でできたのであろう。これは、日・琉語の分離が奈良時代以前にあったことは裏付けてくれるように思われる。

また、本論においては、
格助詞としては、kara, … kara … madi, … kara … nkai, nkai, ni, ya, ga, yaka, yakan, ndi, wute あるいは wutē, shayi, nu, tsu などがある。それらのうち、kara, … kara … madi, … kara … nkai, nkai, ni, ya, ga, yaka, yakan, ndi は、それぞれ日本語の「から」、「…から…まで」、「…から…がり」、「がり」、「に」、「や」、「が」、「より」、「よりも」、「と」に対応するものと考えられる。殊に、「がり」に対応すると考えられる nkai は、日・琉の分離が奈良時代以前であり、琉球王国と言う政治・経済・文化の独立圏で独自の発達をしたことを推測せしめる。

接続助詞としては、ti, dun, ba, tin, kutu (← *koto), si ga, yarē, sē, shē があげられる。ti, dun, ba は、それぞれ日本語の文語の「て」、「ども」、「ば」に対応するものである。tin は、日本語の temo (口語) に対応するもので、室町時代前後に取り入れられたものであろう。kutu, si ga, yarē, sē, shē は、もともと単語や文節で、沖縄語圏で独自の発達をしたものであろう。

副助詞としては、du (後に連体形が来る。), bakayi あるいは bakāyi, yarawan, nde あるいは ndē, gurē があげられる。du, bakayi あるいは bakāyi, gurē は、それぞれ「ぞ」、「ばかり」、「くらい」に対応するものであろう。yarawan は、日本語の口語の副助詞「やら」に「は」、「も」のような助詞がついたものと考えられ、室町時代前後に取り入れられたものではなからうか。

終助詞としては、疑問の kaya, ga, gaya, i, 感動の sayā, na, 強意の do あるいは dō などがあげられる。ga は ka の転訛形, gaya は kaya の転訛で、日本語の口語の「か」と関係があると考えられるが、室町時代前後に入り独自の発達をしたものであろう。i は古くから用いられ、日本語にはその対応形を見出せないが、万葉などに見出される助詞「い」と関係があり、これは間投助詞と考えられないだろうか。今は「ami あるか。」のように動詞の終止形の後に現われる。これは、日・琉の分離が言語年代学的研究による 2,000 年以内の古い時点にあることを推定せしめる。

5 回にわたっての拙論の結び——

今まで手もとにある僅少な文献資料と沖縄語圏諸島の方言の比較研究によって、日・琉共通語時代を想定した。その後、日本と琉球とは政治・経済圏を異にし、日本は

古代シナの文化の摂取に伴なう漢語の輸入と共に漢語を基本として複合語を作る造語法を取るに至り、琉球は14・5世頃の土侯国の対立を経て1350年察度^{まつた}が王国を建設したが言語的には他の影響もなくなお日・琉共通語時代の固有語を基本として複合語を作る造語法を受継ぎ、また圏内で独自の発達をなし、また14世紀前後頃の鎌倉方面との交通によってその言語的影響を受け、また地理的近接関係や17世紀初めの島津氏の琉球支配による薩摩方言の混入があり、また1879年の廃藩置県後の本土との関係や国語教育の浸透などによって、今日の沖縄語となり、今や同系語と言えるほどの異なった様相を呈するに至ったと考えられる。